



特別
No. 4
4407
1



特

門凡4
號4407
卷1



曹司谷白眼高田落合嵐山

全圖直德撰

縣磨再寫

昭和32年2月14日
兜木正亨氏贈

曹司谷白眼高田落合嵐山 全圖 直德撰

縣磨再寫



昭和32年2月4日寄
兜木正亨氏贈



官中の隠士白兔園宗瑞先生四ツ巻の市中に筆せし
 司各目白兔園の若葉う那とみ雛の白阿りし後十月十
 指の視指をうる世もつてその辺里の図説と述ふ和歌葉の小園画
 と題し何の時山に迎ふ信江舎主人を田舎者と云ふ書を携
 来て云地志の古跡旧説を記せると云へとも言偽又おろし補益せん
 との十七八の思ふを送りし書しめると南歌先生の雷の婦とを
 つかのち許すらうと云ふかやうに辺村の日記旧説と云ふ又年忘ふと
 云ふもの思つて送る信士と云ふ先生の許すらうと云ふもの思ふ後
 大久保南小翁漱名貞如と云ふに大田草先生と案内と云ふ
 様葉村の物産と云ふと云ふ時江戸志再撰の思ふ一頁をとりし
 月とりの地志巡見しと云ふを流ししと云ふ其後愛嶺林原の寶庫の

内のかき穴有り口はせむくと奥深して方九尺不解を中一脚をけ
三寸斗佛像石上に坐して今良昌を守りて以而を穴八幡
と云ふ穴今に有るより神光を多く増しに大社となりし當山は往古
阿弥陀を山と云ふ佛をの不得と不知今に何とてん是を八幡の本地陀院
と云ふ也

○光は招きの夜に光りし及石とは彼代残り招き招き大思をの
程樹とは今不堂へり別前門内の招き同程の樹ありと也

△流鏑馬は將軍家御代の御賀例より高田馬場を行せらる
其時當社におおり祭法規式未との行はり列次亦不出委し
今も備の亦と并し古來の流鏑馬は近頃内に行せられけ地不
傾けりし古來名者りし中古寛延四年末五月十五日祭りし

皆的の苗名の額に納り九者嶋田を直方十者筒井七者をら
友系忠郁十者番河野吉十者越智通深十者飯岡大三郎源直能右四人
の名の也△安永六年二月初卯六日流鏑馬射手廿五者弓太郎ハ
深津源市郎正豊中若弓次郎廿五者目和田千太郎源藤忠とり又△
寛政五年二月四日流鏑馬射手一番和田仁郎源藤忠中若十番目
三浦五郎三郎平義晋初卯日正午時終打廿らり右市弓次郎のし
白頻友の弓を持的持矢取取上下と一同供奉を亦不委し
△東照大権現本社内若宮八幡普賢堂護摩堂鐘樓御輿屋小社多
△名本藤丸黄楊志此梅裏門より見出花の登の以今之考る也
△本社の前西側石礎の後り寛延三年三月晴天七の日觀世太丈
一世一代の能舞臺の跡今に破壞を其時間の程之よりの跡を考と

○毘沙門天王 田村 上野岩坊上座天台宗也 禪英山寶泉寺 別當

砂子と云本尊慈覺大師の他田原友太秀卿の守本尊と云

同画像有り且上愚説禪英上寂家の法号なりと云上寂家と云

有り一水稲荷の事なりと云寂家系圖より見え多りされ毘沙門天

の往昔言久し願長崎道榮等毘沙門天ハ將門對治の事

影現有りとも之傳秀卿の幡立振今若木智石灯籠の

服有り堂の南朝日庵と云有 目白関口辺の跡屋佳景の地なり

△船はふき松山中はと有りし今松原 大猷院殿古杉何程ふ

也と直尋有りしに別當九千年も及す也と云上され千とせり松

丸瀬夫下れ松原船とせりも有りけり此の垣外田面皆入海まき金川

の流所なれと鎌倉街及芝の辺より西に關を登り本水川分所城

横切牛込酒井依理左輔の池下巻敷まやと御庭日三々こ半

山根の大指と今も指掛梯と云今有りけり池小笹坂と云又木下傳

の代と云と云此部の形の石塔有りとも泉原の下松船渡場と云り

是より船多く入江川の高合城は毘沙門山と名毎せしと云又

は

△此田垣まけ細流むり 金川又男か川凡今かに川と云文明

年中太田道灌公拒獵の七月夜を設るれ行りか如く山吹の下の

下を委しと云

△いとり池毘沙門山の林原に有 大猷院殿涉水と云の同せり小

名まぢにと云上れ所蟻の池と云名舟と云れ

△此地時鳥の名所なりと砂子ま介も云えり

^{茶高が}
△兵家茶話し 祥英山宝泉寺にむかし 後醍醐天皇元一王子
宗良親王正西將軍の宮と稱し 寺より武蔵野合戦の時陣と取
り小所と云ふ

君らお女のことた何れしとらん捨て甲斐に命かりせし 宗良親王
け歌を揚書記にア見えしあり

△水稲荷大明神 別當前同 文龜元年上杉治部少輔友良の
養女志小靈珍有りしと養小幼後には飛馬の社と云ふ由縁と云ふ
元禄十五年四月又養有る社前の榎の川に舟あり水濁りて
出た此の舟は眼病を多く小灵珍より志多を救ふ人皆水稲荷と
言ふ又老父の云け社と戸邊の社と云ふ何れも稲荷と云ふは
王家の社と云ふしと江戸之邊の社と云ふは是れ何れも稲荷と云ふ

△常念仏堂は由来さし多しありしと云ふ 綱佛地蔵尊二基

△南寺宝物多其内楠正成の兜徳田 大久保保三郎忠統より末裔
成りしあり由縁有りて綱御座と云ふ

△毎年二月初午奉射祭と言ふ名もの形ものも何れ古法祭式の慶
御小世々々てかく成りしる衆御佛の諸説有りて一憲法本記聖徳太子
の説にも入しと正神國と云ふ邪神魔王の使はし人事を振ふと云ふ
もこの事のこと何れ成行しんといふも衆心の寄所なりと此地斗の
るやと何れ七州打んて年々ふかく成行事國の裏行ならん九月廿九
十二座は五座の神樂有り是れ名のふ成りたすかまはれを傳りし舞
樂と云はれぬの如く遠くを越えたり其舞の唯一息と云ふてたまふし
そ何れしと云ふも大久保の舞も成りしるは何れと云ふ

△高田の富士山の安永九年五月末に成就するに備へて天神前にて
先達の後四席の門人白き行衣を乞ふ本石を集成例年六月十五日
十八日迄を別集と富士淺間の二ヶ所此花咲那眼を勧請右の鳥中
石坂振寄坊より約三年小樹成就も小洲嶽の名有り云々
行々嶽と云日遊聖人の旧跡を写し置て日遊聖人の美事と
納めり人々と云茶屋多水菜子妻妻其の蛇を外種と云さく
人影一りり夜は旅と云

△南寺裏川前皆所家有りし寛政五年年季阿けより五拂
り作付ぬ南寺坊あり云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
補ふて実折し者一と云△戸塚村坊一系に皆川宮家寺領あり
一の後 海松寺領と云

○八幡坂下東不地花を云々

○松竹山竟泉寺又院を号同所也山の予十五高の観音堂有り
古言宗あり観音天安置法 或人云當寺は圓院辰輪画像観音有り

○万年山法輪寺同北有岡村富士山北山平門寺あり勝者派也

○東福院古言十三番の札所観音堂有り

○観音寺観世音の作の中心一石田何某寺あり則

一と云と建立と云或人の説不石田後刻を云々云々云々云々云々云々
限位をその末葉に松村を云々云々云々云々云々云々云々云々云々
並り古言或具又書拍ありし 石田の昔 久思と限位せし
の地名字を石田前と云あり

○古言と云云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
古言と云云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々名まれりやむろしけは家多有り十塚も如とも不定狐塚と云ハ水
輪有社の服は有協の事也と云

○相承通古海は色澤倉名浦も志船と共思はる前より方如く昆島門山
有り観音寺は前々百姓の垣地をたの出世の乃り傍り更所の隅に清水公
山用を東門の所より海陸二道の縁倉も其所の許政の所合大観有
今之山崎の里と云る也

○高田天神宮同村言言天竜山真定院小野同社西地は天神所
是之名言言歌仙額今迄一切は花々五十年以前は是に移る所の守護神
鬼子母の石像今有大持立交建立社ありと云 尚寺の向に村入の
細道は南の角に位は家持ありと云

○富士後四郡と云者有り生る律義一編より不二山を信を著書は年一

千代系諸大先達と云史の之の次^様なりき身縁と信を不二入定とも
このの差を友と云と費しと在^様つと云家来を事と文育多れと云切て
文字も似多し事と書そく呪文と書強し侍と多法を此にお守り神と
よ有その身縁富山奉ふ入定して身縁と云る是之に何の事と云人の云るに
流^新は菩薩と云わたりて勅命も此に油也も菩薩号改唱る事服勤
いふなりと云

○高田天神の山は道有兼井山^{兼井山 不守}通行の事と云昔八幡境内と云
と云

○尾石公和田戸山の家を發荒藪山の本地分餘は發入と云むりー和田戸何系
の位宗は今和田戸大明神の社有り於石氏伊勢の三下ふ分付と下の禮の大神と
なりがまゝ人の細と云はかるそ有山伏と云まを書多る及伊勢の三下は後と云

外に之途川の邊の像も鬼赤鬼と残りしは安永の性古隅田川合戦の時
勝利ありし時存あり頼朝公和州戸の館に入せりし時休息の内地と表せ
りしと砂子ふらふに傍に坊にせりと有るは此の傍の然戸塚村と云ふ村也十三村
有るは此の東に此の地を先におのりしと云ふ水の濁と頼朝公の御所と云ふ源忠村也
今に老人の言ひ云ふ又戸山を教を南大久保通と云ふ所は教の内を池と云ふ
其の池は頼朝公の御所にて池邊の道は甚だまて落しゆふ今に池の
まじりて有と人云ふ

○大明村と云ふ和州戸の内荒瀬山と云ふ所は亮朝院の縁記に明暦元年
の春 嚴有院殿の法御祈禱と亮朝院日暉聖人小伴身と云ふ殿に於て
一寺を新念り即時お平愈りし由儀と云ふ御所迫りし作有て此の荒瀬山よ
七面の社と御建立ありし及寛文二年尾石千代姫君様御祈禱地と和州戸山

北流地村と云ふ所かとお入亮朝院交山寺

下戸塚村に引移されぬと南山

は昔斗存張と云ふ史山寺の持御所御推現と云ふ姓九人の語も此の今に掃除
役と云ふ年と云ふ拂りしと云

○和州戸の風景淑くはなと云ふ 及今せり江都より京都の御驛路五十三
次の高き石を石物と云ふ後舟山乃茶屋渡りといふに本陣旅籠に
まじりて同屋川渡り 舟東海道の名物と云ふて 何れもと云ふありしと云
及今 御成程と云ふ 愈増ふ良藤を云ふ一ありしと云

五十三次の事日東將軍御在府地を出て天子の皇都とての百五十三次
日本のこに何れも 梁溪漫志十三卷 廿四章 唐の徳宗帝の朝小金華縣
と云ふ鎮守將軍と置從夫唐洛陽の間五十三驛の旅邦也
宋の山谷の詩に五十三驛是皇州と有林家國史記にも見ゆと云

伐せりともく女の白土塚斗式人君して敵伐待氣疑も赤鹿ありと見
物と云度いぬるものも多しゆりゆり地頭併杉平代官能貞坊と云傳今
此道と云く高場を横せり不道と所著屋と云免て水巻危改言家
北の土子小川除杉と植植切入り成制して杉の石松売と植と坊
りふと高保十六年此頃也と并友に存るの村の年家ありと是と植
させらるる家とあるを危改建始しと高保の因り初り成制と初め
り家の木家前よりひこらるるなりとて思傳あり前の杉の石
板捨家と云ふれもあてかりの本改植と御ち家と杉の石松
てし地て置人との本秋家前斗植家今にけ枝もい後後人今木東
右高保才御舟の信家とい若の宅二階危化ら場えと心ともまを今と
○感後少將志輝家の沖を母は赤遷化けりし後より馬のけり土場とわらる

家故延室天程の地と云ふ一之群集の人けり場小満てり賭的大的小
此傳員騎射を介の尼物東三場小結と云し謡土佐外記放下のお人を書さ
せ如け甚多の娘ひをを一寛永九年の時朝鮮人武城く其朝の地ら向
のう場も廣大ありと云花那あるありと傷り語り云やりそ千里の
場と云詩と他をよりしより今朝鮮人其見をけり思傳不修作小
其は流村大的の市上地けりしと云云
一より始ると云其節、津殿三場と云南のち子外に全程の平地は其
改築り中土子とけりゆり又或人の流満と云の時と云延室の以丈と云の
一有し付と云て三場と横よりしと高保の事をも貞享元禰のいふ
△流鍋馬 寛延四年此時三場ハハの南芝切の土地改築と云智行くは馬走
も地盤をせしり家中ありけり時と云て金福前ハハの事と云と秋友に存るの流

高田市内とて一と黄門と称け四里の地は松尾又阿比留村花院
より地は市入奥阿比留其時付花吹や姫と内陸を阿比留せし頼光
今も重光の今に後を後水戸宰相と称すなると山吹の里を外の四里と
内野阿比留と云ふ所と同所の地と云ふ所の説かくの事し

○頼朝御つゆ中て山吹の里に女を住し侍小井守也留るる井
云々の井より依出て水溜と云ふ所へ下根せし義の流場と云ふ事古く
いじ里の老人伝ふ事と原嘉村今たつし一層を阿比留と云ふ事と云
は手はし

高田市景

神兜瑞雲 守宮小池 高田調馬 影橋流螢 戸山長松 大鏡古梅
屏洲明月 鼠山白露 玄國藤蔓 棗棠村雨 東山薇蕨 芙蓉嶽雪
○古田市場 東山の隅々細竹の曲々山世の乃古本街道 杉原通へ山ノ子北山の
石杭有り

△中山備前も極中を極中と云ふ井氏竹田氏の由を後二二と云ふ石灯籠四
の眺望佳景の日記に由を後二二と云ふ石灯籠四と云ふ田舎雀小かこ田と云ふ
平福田辺にけいふと云ふ山吹の里と云ふ江戸志も見えたり

○古田市場より西三路行右に津島村先が田舎橋け橋か加丁平上二年
十洲有鳥居・洲又と上りて高合橋前も高合上高田又橋も前も
柏木村鳴子辺の乃△地花の辻天談行と云是かたふり一りい山もまた
在諏訪村同社といはその山前戸山はやうわに一入細竹有是なり

大久保山昔人同心所へ由組を為の内映まじり左躰躰の以名言まじり名不まじり々
春高種よの花盛り 諸樹木をえりし水家

△諏訪大明神 言言後世未 証証村 玄國寺

尚社、信長上下神社と勧誘に祭如大己貴の御子建御名方神也日月
神祭九月廿七日神樂あり高田上京の内玄國の友曼とて并才桑手使の
池の前は数百余日此後いと多く盛りあり今もそ社の西小葉平思ひの松
とて大指有け并天堂の山方より大松と思ひし一一の松とて葉平の
秀枕東國よりゆりし事いふ少と周山子そ外の山方も仰りし
陸奥の中將受方親をすもやと

△土居地蔵寺 是といひ小土居薩摩を頼り下尾家の水少く成し故さらへ
の時出現せし地蔵く種立を叶日古除は多かり故俗家の悲願とて

あ境内小堂と建し納れり是也今に利益有りといふ

△玄國寺什宝の内籬刀代の西行の像如水法師の他とあり今い述と

△諏訪村勧修寺と云百姓の住を勧修寺小兒五疋のうまき葉の根平に

け地は今に行て葉少けし村中と云い後念の及へ者百及有り

△大久保新田諏訪の系頼朝の傳とてを調練有りしと云

○田代橋の御と俄善法寺を板を一板一板實政之氣が四年の春迄不

お橋ありカハ昔出後討るち秘の嵐山は居あ大久保の辺にありあは

し小津地蔵の御と有り時多しあち秘の道路小をす小故今にその名を成し

△け川勅上は合と多摩郡武蔵に入念その下川並に馬居の洞人

け橋は星川下小屏の洞と云田上景の明月の名とし 次小一里の岩に

石せり入て石を小鳴をすくは里小當時の面は里人と云小云智也

史の上田つとむと云へり移住する面影も一かまゝの下大まうりそめ
名取れ先お記也 田嶋村の小お落合村市川の表七まうり板の麓山へ
わたり東山後移住す山酒井の表林へ思くとも先へ流りて云
佳系の新なり おせりけりおのふ
小なりけりおのふ

○浮石村と云い大坂在城の表水津番付心工隠住多故お名とせり
大久保新田お下る地と一人おおむきお西へ移住す表又お名とせり
二人おおけ間をふり又間を利をき後身来二人の畑地をきけり
磯崎お名も表お名け地お名同同向へり一お名とせり
同居せりおの村お名と云い田村お磯崎氏多し一其一お
お名とせりおの村お名と云い田村お磯崎氏多し一其一お
お名とせり一お名と云いの子お名とせり一お名とせり

△塩硝焼場と御用地何り折一お名と云い
△お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い
大由お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い
と云いお名と云いお名と云いお名と云いお名と云い
お名と云い

○お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い
お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い
お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い
お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い

△お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い
お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い
お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い
お名と云いお名と云いお名と云いお名と云い

△通ヅ西に上居村百姓五形あり何きも間口太間なるあり三百のるを
あると寛文十一年尾州千代姫君御御用地に和因戸山と書上り一時
百姓九人小亮朝院変山寺宗傳寺の三寺七ヶ地(仮下り)ありて代官
なまじり地に住居改めると割後の元坪小足らより景もれも好とつら
わく護明村海松寺領の百姓も下隔住する故もす家故五形一
割後一ありとせとくふ自在なれとたつま唾まき世の永き溢る(し
○七面大明神 大正修替
身延山末 如意山亮朝院榮亮寺 別当
高寺小正法座七面大明神の身延山廿六日境聖人小足及こく云
おの七面大明神と云ふ二種は其像よく高寺関山亮朝院日暉身延
七面山麓行する日新行の時感得する所也その縁と尋ふに天竺福土國
の帝王弟二の姫宮多門天王の御妹君君々吉祥天女を祭る起りて

たの五面に七福助生の如意宝珠と持右の右手に神通之力の寶鏡と持
く小乗和質直の神影也秋尊の御影化古龍女成仙の證明と存
宗祖御化導の時ふも女神と存して中尊と尊を敬島々神女と名を
法華一乘の守護神をいも延山領小降臨育て七面大明神と示現の
利益感無も普く世に知る也故小豆州の玉澤妙法華寺日亮聖人
隔り亮朝院日暉は化現利益と法界信人の為なり一と云ふは
教年積行に及寸三分小蘭と本銀小判呪を書字しと身延七面
山嶽康慶殿の扉の因小洞に三万日間白糸の流しありて三万餘巻の陀
羅尼品被誦し祈念行滿の功あり寶殿の扉自形と開首す前
よりし揚校の本銀飛来して日暉の掌に有不思議正法小お
悉くその前工改棒々中三及飛来する事三を修時の別当

身有て無有疑の感存未嘗有の吳強神を方有とを徑法の力
融言深して利益廣大なりと供に大信力の法味故を捧げし所也
貫頂 聖人と思はれは日長と云り神像と日本同化の七面明神
を日暉聖人小授与しありし關東小下らんとて日暉聖人小自
告て武大牛込護明村小住居也 武大村之慶安元年の春征夷大將軍
大納言源家綱公御式運長久國家安全の御利禱と日暉小作有と
況利益と顯事 有と云老女能勢氏迄に云局の建立として
荒藪山七面を改造堂一曰二年日光御社系の時一部一卷の法
華經を御懸守小致し古守刀小題目の七字成法彫刻有と
られ女恙御帰懐ありと云れ 後日百出ありて種々拜願あり
有と云種の表紙の内小七面を明神と御祭儀有と今尚幸の付は

明暦元年天下代御祈禱所小作身と云く御祭儀也 家綱の
二字御名あり日暉小孫同二年御痘瘡の世川も七面大明神の
尊像と御在九御招請あり日暉小日と御次進登御作あり
宜衣御祈禱其利益現るあり御感悦法何あり三十間
四方の社地と御附ありく尊社も御建立と云御城小新官小遷
云一なると云御張りと御上せらる 其吳陸淑小思後と御
人々感應莫大ありと事と並く云に少亮朝臣の御張守と事
稱小痘瘡諸病の法也と後一部一巻の法華經御守加御名と事の
二字ハ皆古書ありあ山小三種の法也實と云是こも寛文
十一年申込五明村尾云公千代姫君御用地小何り地と云高而
小事社と移し旧地の通除地とあり元禄十四年桂昌院殿大徳の事

あらせられ如意満足の沛感しく此系流の慈養御紋の五水引御至綱又
尾取の産を憂ふと云し者一寺所食し事案願也一〇年と云はれて
福徳と授ふ事今この宮社不の仁王尊表門近所一人の事附有り信力
福報の冥感今も眼赤多し 有徳化殿の沛分御祈禱作付
これ一時去例より一〇沛紋の五水引御至綱又天下恭平國家
安全の御祈禱且夕々無怠懐とよ之門前小十力の塔并朝日の宗祖
大菩薩の巻中不日々常題目は多施し紀茲振すり永代常唱の
沛音進り身延七面山と別爰不写十万部常唱を朝日の祖師も
身延の地名もれも尚祈常 寂光土同の法場なり一 下畧
△朝日もの内眼病故護目朝上人の安置高山毒圓衆院日可聖人
常小眼病と患て且暮勤行の餘積ゆれと行ふ既日朝方の法味と云

祈系御の御北者經不志りまはれり本尊宗祖の像月々に流
して云秋小眼病平愈と祈又日朝不音預もろり久し感動自他
有事なり信心強成精力充滿ゆれと別祈の叶はるかあり
平愈の後像と日朝と云一衆生の眼病を平愈せんと云ふ
故小同度不安置しと云ふゆれ眼病と救護しゆ小秘妙の身中守
の利益人の知る事あり △けき樓閣作り古来の伝あり再造し
園林諸堂閣表表し多あり也 △諸佛房律師道善法印妙日妙蓮
尊佛の五百廻忌の塔十世長代建△宗門建立會四月廿八日法會八江
高きもの法徳山小堂なり時山寺に在り七月廿六日廿七日廿八日施餼鬼百味供養
九月十八十九日七面祭音楽説法信養毎月廿七日廿八日題目講久し至星
祭行りま外書不あり一 世尊堂釣鐘朝日様日朝聖人

浄土の極の事一 大坂在借養石塔有り

○神明の森 天照大神宮 神靈山金來院別当也 云々 高田村在
高社に源氏居村の張守ト云く小泉源氏居村の西宮小泉龍ト云く靈
感有りあり居る時爰ト勸誘也 醍醐氏金來院ト云ハトト
住し事有け縁ホリ 森の事金來院の地ト云

○海雲山夾山寺 祥宗ト云護明村ト云 遷移を亮朝院の事ト云 界
大なる石佛七八有り道土控現の堂も在の在也佳景之

△浄土嶽控現の宮も尾 長石和戸山の内ホリ今に夾山ト云別當氏
没る姓九人の法年ト云

○宗徳寺 同所ホリ村ホリ移し 宝永五年 子正月末 漸松寺領中里村
ホリ移と云土控現の社有り源氏居村の内ト云 云云と知らん

○雑司と云小津太右衛門の代地源氏居村夾山寺の願より亮朝院の後ホ
リト云ハリをとりて自院現領の地有り 外戸塚村の地有り 源氏居村大久保
新田村間有

○向砂場と云則山吹の里の事ト云 山川居程居ると云能水寺居神明山の如
願ホ有との隣ト云ト云ハリト云 龍泉寺の事ト云 云々
臨去成聖院と云是ト云ハリ 征伐の以け奉るホ休ム時ト云 出ト云
回ホリト云ハリ 云々と休ト云ハリト云

○西新橋又傳の橋 砂子ホリ 推掛橋ト云 長拾部四人と有 安見と
云ハリト云 人ホリ 橋ト云ト云 云々 西新橋北流堂ト云 雑司と云
八坂の内ト云 安見橋の橋ト云ハリト云 小橋の方ト云 以け水ト云 十三里洞村
ト云 妙ト云 妙の分水ト云 四谷角筈村の上ト云 橋ト云 云々 四寸ト云

け川筋不存来今一筋の四谷出づり日在揚向の上水、故といふも方面
のよあり井の頭地と源と也

△井。隆井才天中野天名上野末大盛寺別当 当社御記云建久
八年平源頼朝公平家追討の多末建立仰り西暦二年申新田成良
孫倉と對陣の時新推言一北條之久思け池水七ツより涌出する故に
七井の池と名しり寛永十一年 御成の古け池ありて御茶百十

也御堂よりして茶臼と御茶納あり 寛永六年 御成の如
矣水よりして御成下引せしとき多所け池と名の幸夷の松小井の記と
御成御成仰りしより池の名は今尚寺の什宝と名揚板の柳出こ
一井の松と池のよあり有寛永の記け池の邊小塚其の頭の如頭と仰り
く多所と各人より有御成とて有合徳よく拂りて頭小

あさり七の記より死ふけ首骨の頭のとも中野御成ちよ一有り
象の記も同存ふ納り也一書小承徳二年け上水御成らきの時かゞ
ま前東の方中下斗の処小田中道ありく川か加しと大昔も
大川に上ると見え河系石地中の岩のりかある所も有りけ西見え
村家城根屋と云も川有りし時より記ありけ松田の景春等
の遠近不雑の多立く若柳の色と高の邊り多ありとらか小
打も北と見はとよきけ里なり少もあ思子苗と加し一ふ見え
くかきつとよ昔蒲あやめもりき方て目言ふ新のすありを童
あつとむれ、蜜むらふりなれち竹の葉舟のとりくみ故かりく向
ら山あね根まの里の所むさし一とむれとよまよひ立居る
田舎と名ら思秋の初丁右月も花小記も小雪の初を記

せんけ里の風信等々もそそりかろし

△北と南のちりり小田の畔たしを持統と云上水の曲りあり
ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ

ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ
ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ
ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ

ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ
ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ
ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ

ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ
ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ
ありまか上田のかまこととうけまて定り南よ

△仰橋は古木板橋より幅智の尺余の儀は常橋なりし
のよりより土橋の跡はさく年々橋よりく思ひく

○姿見の橋は六七尺の板を東西小池のちりりくあり

のちりりくあり

のちりりくあり

のちりりくあり

○氷川大明神下言村惣持 真言護持院 大鏡山南蔵院 尚所

此地と表の縁と佳吉云々 麦と白湯の同所 杉木の社 三峯 杉現祠有

足立郡大宮氷川の社 武而の宮をれと南國の氷川の社を多し
凡そ記 去者昭天皇三年戊辰祭る所 素盞鳴尊 天已貴尊 寄稲田

比咩の三在り初言と云 又云大己貴与少彦名 國韓神も書り出雲の國
簸川上と大蛇と退治し 今も故少け之神と氷川の神と 舞も日本武の
方其素盞鳴の正神と 殊り 東夷証成有り 一より武取足立郡簸川の

今予之神と祭る人 東國流身一の事を定むれ武州の村々多永川
宮を流せと祭るに武州と書ぬ鏡の川の同訓なり此の字小書語傳ふより
凡四月十日奉射的の祭式村中各苗小行ふ昔の矢火に一帯小矢一二
腕たすと短矢は是出て矢と云名を年々祭祀の尚形此の言取つてこれ
と射的の式は楯小形中を定を送り来るを定米麦の作り神徳村中
人別共事の酢^{いまいち}源と作り易そあや切り呑ふ豆の湯とさまし入てこれを
吞服おめしけるは山折がふより縮言と焼指のまふよ小書言と折
る著と一日光後おさかり如とひりくのをさる早急の外と折れ又折竹
梅の意の物とて大根と切枝の枝梅元も世をさして折あ中のせあるを
是の後の規式ふこれとゆはる外大鼓おと打ふまひりくはるの儀を
此礼は神祇なる納受しるふはと有強くさうく作り也六月十六日

法永身量偈普門ふふ外 秘密の系法有り九月廿五午正廿九
ちと有湯花也神位も少氏子一同ふる信してこれを守る如信して
いとて一寛政二^{△印}夏洋殿再管成る宗國々祭るを古額破れ
る万里三巴中秘傳風ふかりて今又再興れ

清納法白樂

武州の村々多永川 宮を流せと祭るに武州と書ぬ鏡の川の同訓なり此の字小書語傳ふより
凡四月十日奉射的の祭式村中各苗小行ふ昔の矢火に一帯小矢一二
腕たすと短矢は是出て矢と云名を年々祭祀の尚形此の言取つてこれ
と射的の式は楯小形中を定を送り来るを定米麦の作り神徳村中
人別共事の酢^{いまいち}源と作り易そあや切り呑ふ豆の湯とさまし入てこれを
吞服おめしけるは山折がふより縮言と焼指のまふよ小書言と折
る著と一日光後おさかり如とひりくのをさる早急の外と折れ又折竹
梅の意の物とて大根と切枝の枝梅元も世をさして折あ中のせあるを
是の後の規式ふこれとゆはる外大鼓おと打ふまひりくはるの儀を
此礼は神祇なる納受しるふはと有強くさうく作り也六月十六日

本は十万余の樹と潤し一町に社社の神徳仰せらる北ありあがり其
多量の木成りあり樹の多量の下の藤原村かきつりそ第力木の果と
なりなり

天保 丰水野美濃と改則治る蛇と得て白蛇兼天と号し砂利地 治は社

高田能尚節の南側 13年改則 三河伏中尾(九國許)一記世も利益はらるるをこそ
物一毎月十と七と六。法人多治とゆきれし。改則は未妻青山恩田より火く
方の直捷な方時此中利日災ふりし。後計親考を言田砂利地耕地ふりし
多治とゆきし 仲のたががし 崖不足と之山下池と堀燕子花と種類を并
天神社 白地あり天の多味 天神何り 白地あり天の多味 天神何り 白地あり天の多味 天神何り

△卯ヨリ

年月月石の多治輪垣村より御家進古本 出 水小折思今も大松本 出 松
○大鏡山南蔵院 高田村言言宗 氷川社別當 八洲 寺と云八洲ありしと
去り 大猷院様教後御家行り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り
小とそと有し 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り
今にあり若木と成思を代今 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り
かつ及の好まるとあり 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り
を食け 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り
流いて 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り

△某師 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り

田記 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り

○計表 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り 八洲 寺向山小折り

分も名をいふ大野氏の二端と云別家大野六右衛門と云同村の名に分有

○右に橋を架すと右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
石見の川に橋を架すと右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
文明の碑有

○奥羽橋を田村の東へ入橋今石橋と云右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
昔南流の境内に杉の山あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
黒田の庄を築き居り古来奥州海防の杉今にも並木有り黒田極の山あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
△川道法の名は娘に依り大野の庄境内にあり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
四五十年前水戸極寺を築下り石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり

一と田村を出入りて右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり

△秘蔵 右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
分は右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり
右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり

○氷神の社 洞重寺持 意隠庵と云別家大野あり 佳景の境内也
北辰妙見大菩薩と云所也御上水の清浄なる所月の四節の祭祀有り
右に石見の川あり右に古木あり橋を架すと用水の通路あり

神皇よそ今に明くも小極白陳の大尊星として天地日月震運四季寒暑万物運施回輪の軸とかりのしゆり尊皇の無流を委り論語も北辰の正所を衆星をたれし向と云ふの方の大星より年中二方の弓取也りまふの三故三頂輪王と云ふ又如又大菩薩と云ふ稱け代り八幡文如法あり下の八幡と云ふ月白坂上よりやハ就院座小遷座りりん

○胸^突手板月白意公平福自開只を流の少及之を急ち板小右舟もや○牛込右左三振をむむ子つ板^上高^下の^前小^{あり}武^器牛^込の^縣下^信覺^祖大胡太郎重俊の後高官田小補より武具牛込の信をその後勝行小奈氏康小属家の地といふ字と云ふ牛込の先祖の法名宗系大庵と云ふ墓宗三寺の開基之は古大胡常陸と云ふの上野國赤城山之夜沢の神と信仰と大胡と云ふに動法して近き神と云ふ今に有り 為社大胡常陸の末牛込

右乃の之組の上赤城の神を牛込の惣領として動法有り 平福田の田代中ノカ右林の是成とと赤城と云ふをいふ今赤城の神の地小遷在りしと也日光山の記云く下野二美山^{今上野}の赤城の神と中野の湖水と事ふ二美の神ハ蛇^{まじ}と云ふ赤城の神ハ蜈蚣と有りたり小由有^事け^たりしと新所倉賀野の弓田の中程より忽迅風起雲七度来て日中闇と吹雨を水成^何け^る如く電ハ^推成^ひて^打如く^一之^時か^りは^二時^ふる^まま^しい^との^風西^を吹^りて^小敷^く病^を引^ける^一

○五月雨塚 芭蕉翁の碑言先建 黄檗洞雲寺持就院座と云 佳業の在有牛込早稲田三橋りふつり富峯さく徑入四面の風景折上ぬれ時かりり牛込紙小直うこく東南小赤壁の山より月白橋の事をもさるる此道より花の雲の登白も堪おての紙漣も浪ありり此園の嵐の声も厚く前々ありり流

有りて千丁の地と築き雪月也不富源田の如伸る不似きとて一先とんとの
 とを伝傳と供せせしむる月雨ふかき道との彫り場場の難冊と場の魂小
 の孰の深舞しむる石の彫り
 神代紀造り此地の佳景改感し
 夜寒の碑文建むる一物をもの思ともさし出也前文則若
 言しきりし以紀造と有りぬりは師の身不

蝶舞まがひ相を小秋のちまきふりつるのまきりつと清一古歌と奇
 てかくしあの名を唱ふ也今も人不知知り多夜守の思と歩者も有りし之
 或者けりふとまじり有負の衣子の前か雪降てゆすは是か秋一夜と成りあす
 尻よりして起んといふといふと柄下り多まきりて介多あり
 言陰也 宝園抄

△風羅堂の五色墨とて是毎日本古の能法を自らの修行有り後多化
 と今にけ今も城清りありとと海口氏に布而三月の七多を降るくく氣の色因

宗瑞先皇小讓りて四十年ふ他の能造るれい此地一寺故建祖親の像
 梅見忠七一世代の細工とてけり多如境物の像成多立匠人本想とて
 けり松風抄史文の自書芭蕉の像画と付しは白鶴園史文後有附今巻と
 山積池を埋ぬ下りさるり十卷借巻とてけり堂の造立城形とて
 けりも敬障りれとと重陰巻まふけ事成遺しとふ死去三回の前子
 送立して能指万部の供養し一何思も有起むりしけ上り由開のせり
 芭蕉の俗名友堂達堂とてけり以てふけ地は海り居て能中色一風系
 今も改めさる他多れいる先宗瑞とてけりも格別懇印せられ也
 本朝文選作者列傳云今風俗文選と題名れ五光井新六選
 芭蕉翁者伊賀之人也武名松尾甚七郎奉任藤堂家壯年時辞官遊
 武勳江戸風雅為業號桃青乃誹諧正風躰中興閑祖也嘗世為遺サカ巧

修武小石川水道四年而成速捨切而入深川芭蕉菴出家年三十七天下稱
芭蕉翁遊東西南北說風雅助諸門人國中悉歸芭蕉風一過難波津
伏病終卒年五十一葬江州義仲寺 風雅堂芭蕉翁別號也故名

江戸深川芭蕉庵と云ふ即ち在唐と云御用の鯉庵也と云深川の平野所辺に
あり平野舟内と云名を鯉庵の末よりし兼翁松尾と云東三十二の御階
を以て定し是自享六條の式目或祖翁より遠く芭蕉庵の主人松尾より
一 右翁の後身年髪短けて別髪に云疫多病翁也作りと云
兼翁と云一と云何りれば兼翁の字の冠は取違ふなりと云 採茶庵と云
一 此翁の細業城也摘は兼翁は是也翁を以て兼翁と云桃河の法式を以
れば自云して授は兼翁問談書して兼翁祖翁の自云云の法式を以て
兼翁書成け給付堂に松尾隨問書と云世に名を古也也城也

其のまゝ云翁の自云深川住者外着のり家と云芭蕉庵と云の事也古也ハ
鯉庵在唐生洲の法なりと松尾家の正嫡中川氏自免國風堂二氏唐と云
自免國宗瑞三代松尾氏ハ一人ともそ存生たり 兼宗瑞々四若ハ何法傳
爰に何十古年以前大坂九助丁柏舟老人松尾也云云其の法傳
小梅傳也と云予ハ兼翁柏舟と云と云宗瑞ハ中川氏を傳ふなり平野所
舟内の事也自免國衆民列の法也此ハ今平山氏梅人なり舟内兼翁
也松尾表翁の下云外自云の本年舟内の縁家より一紙を以て
松尾の後裔と云二代自免國の門人なれば他ハ何人より傳授すべし
風雅堂芭蕉堂宗周建之東園補助也
○椿山浪倉全載の法也此ハ伏法と云事なり其の法也椿山と云
名は此ハ兼翁と云此ハ兼田也舟内の法也通は非人ハ何と道たて成當は

かき小川所分各法新と城是神田出なり

△下水江川よりきて立寄抄より小川所へ入飯田所城留小むす系扱す
神田橋下流系正寄忠流の上より小石川末前之立山下下通橋有
昌平橋有立小石入仙傳降実守正寄抄を城系先四やうらの系前
橋有△仙意橋と云抄の下より石切の捨石と云並に丸石の寄り絶夜傍
とんじ抄と云下之立山の川原より石垣建是後氏正時之末も時改
成と云と御正寄抄有と云傳りて城の古学今も尚見え
るにやと云傳り

○新所より河内河原より河原を流る川相違し人多くありて所を流る
舟車も流る中流河原上より流る方取切り多し難て其上より下より上より
水より流る油を流る河内河原 年中河原よりけ地を足定て縁香城化里

出して人多し高せん其及多助城打ち車より油と云を非少成す
安の北と立高木の實験す他世家人今も今に采りり辺は城考の井也
名能しと云流し

△名横山孫より高所草合の百姓より往古日向石筋の物小住系
古本の武量より古き書物城考一竹系より日向中古石合の石も住
系大英小付書史といけ辺より系考大平城考城考の古書
多し出る厚井神人系人の所も有りたれと古本入海系考城考の古書
き芳心流領名と云流し横山氏の抄流し

△諸村方水帳と云有り日本記も云城後船夫二百六人十揚舟有岩上
陸奥常陸も人國記も船夫と有王化ふ伏を忍と云古時城考及伏取
系考の古本と云通ふ人なり一故より年系考の京教や甲國と云る

彼等改修せしめ姓を幼い天下の民とて民部寮の民図帳に
えづ
らるる也和綱三年の処すと云ふ

○南蔵院前より金葉院前の石元田畑を阿波の道に改修可成
此の田畑の石元定りし家も南蔵院畑の石元の東にありと云

△この田畑は永年中より阿波の道に改修可成此の田畑の石元
綱事ありて永安元年より阿波の道に改修可成此の田畑の石元
此の田畑の石元定りし家も南蔵院畑の石元の東にありと云

○神靈山金葉院 護國寺末と云ふ前蓮花寺と云ふ
山号改西五百年より及ぶなりけり此の社地は四ヶ所
ありしと云

今津島古き且方有一ヶ所は方ヶ花咲那娘の御額ありし納有
水戸黄川光園御印事也

△同所の上の山の中 の花を子に親方せし事と云ふ
心願を村中
四家村中の方と云ふ附を 建るといふと云送他ふ力及び五七年入佛あり
しと云大御民志多房の妻と云ふをけさ志まりに心願を起村中を婦
かと決ひて終ふ心願と云ふ意改九三年 小再送入佛ありし附結の
事也

○此花咲の御額を社に納むる事と云 別所金葉院也此寺の北畑に流て
乃有東山の表標ありて居合畑の内中形也是也昔より八葉と云ふ姓の
地照不有と云也木花開耶姫命大山祇の神の御子と云ふ富士大御神是之
を由りて此の御額に納むる事と云ふ事ありし社ありし

○金葉院の南西のうた大匠の四家有り平名と古葉今名花と傳来
 不知何寺の向ふた城入と礎礫氏の旧家代々忠告と云大坂後城の及津藩村
 ありし礎礫まじりの松牙物と云金葉院の松葉まじり礎礫も又
 大師の思ひ一高野の同志の内より有久まじり細子評何と大師氏より
 傳来ありしと云人々あり

○岩坂の関、関東は海の関と云古又四谷大木戸高野関と云その辺は
 南と高野村と云一と月志三三三の古古関村と云ある由北川千住の

○高野関ありしと云今昔金葉院うら門のありがけ平名高野関ありと
 或形平葉をたかきしりし尾陽公御方の方と云ころ尾陽公御方垣の下
 南の垣か一平地あり忠告の後に昔より幸有りしと見えて三四五百年及石碑
 四枚け垣を為高野村一南高野法蓮寺塔下と云と置如正和の碑
 石小建てしり世如今主徳を懸く水いふ名文明三年の碑の礎礫と云
 △関寺公傳として今ふ百性を実持指役中日記持傳傳あり今ふそ未
 存せり

△高野つてしと云礎礫今金葉院の後空地の女捨坊のありと云り関の上
 まれといふを有と云下塔と云やまれと云と置如正和の碑の礎礫と云
 家の跡と云しと云と云へんからし昔の村の境ありと置如正和の碑の礎礫と云
 此の事ありとの教ありしと云四十年昔の古裡ありと置如正和の碑の礎礫と云

火とへまきあがり、家を焼く。小倉一里の敷人、夢及へり。又、^狐小倉越れて、空
々々やとぬ。一時心付て不化と云り。

○鎌倉から、空地の向、御垣の向、小倉の坂、今、竹木生え、まじると、心附、
北のへ、今、そ、は、坂、口、小頼朝公、旗立、柄と云、つ、し、古本、小、す、り、枯、根、より、
若木、生、て、つ、つ、了、野、説、考、を、も、も、の、東、小、何、つ、て、古、本、古、つ、り、し、時、の、
祝、音、か、り、し、し、れ、り、

○尾、石、極、西、尾、敷、り、し、故、出、来、水、戸、権、守、頼、貞、は、殿、さ、り、上、ら、れ、る、家、も、
由、姫、石、極、り、は、ま、は、西、尾、敷、表、流、門、の、内、小、鎌、倉、街、乃、の、一、里、坂、行、り、昔、三、三、司、の、
大、板、行、り、明、和、元、年、小、松、火、想、乃、の、改、定、今、松、城、極、強、く、は、庚、申、の、石、碑、古、く、
不、知、一、布、之、祿、三、年、西、月、十、五、日、行、り、乃、の、改、定、相、と、行、り、し、と、云、り、寛、政、七、八、年、
の、改、定、相、と、改、定、れ、る、家、也、云、り、

○西、尾、と、云、い、は、門、の、所、より、山、へ、行、り、て、西、邊、に、し、今、の、辻、今、東、水、の、う、用、古、次、氏、と、
三、三、司、の、お、お、と、云、い、の、後、の、先、祖、四、新、り、し、時、の、ま、人、あ、り、今、ま、人、も、の、事、か、ら、
違、華、子、の、地、不、住、り、を、不、平、氏、に、中、所、不、住、と、い、は、し、源、を、ら、た、と、云、下、也、
を、新、新、倉、氏、を、川、越、新、倉、り、出、て、住、ま、し、と、是、り、上、下、四、新、の、先、祖、
ま、り、ん、又、も、新、大、人、人、ご、柱、屋、と、云、り、者、を、皆、酒、飲、化、り、哉、と、云、い、り、家、故、
け、如、の、家、酒、林、と、水、帳、子、も、有、り、し、四、新、も、外、に、皆、飛、く、の、村、家、の、ま、こ、
し、と、信、守、を、祀、の、ま、り、沙、河、壺、高、所、小、古、本、大、持、傳、て、御、神、酒、出、備、
汁、中、所、分、持、り、と、依、り、内、陳、を、ま、り、法、系、祭、と、云、い、り、小、娘、泉、の、神、子、湯、
流、の、湯、と、依、り、別、高、又、村、長、と、云、い、り、ま、り、し、り、所、内、一、持、傳、り、
家、毎、に、祀、る、哉、古、例、の、古、水、と、い、地、と、云、い、り、ま、り、し、り、古、来、四、新、の、
時、り、り、と、云、い、り、

居並せられりありと王政なりと而し地元の底と居宿しと長尾を以て建しと有
しる中北但馬赤松の世及び其後を在りしと中山極の百出川而して
箱並入致とて地面を主とて居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
多の事ハ赤松の居宿りの後居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
△古来所並り居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
其外西寺の居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
作りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
昔と居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
を人奪りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
之の双方居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
○雜司谷に例し居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと

二節と居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと

○大櫃 大櫃 居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
鬼子母神者居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
ありしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
又一院四家の所居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
小岩川中居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
並居しと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと
本居りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと居宿りしと

湯谷より出た火のふを大に焚けて枯草畑を度斤焚伐家以て見居
る多村のまはる悔り之時大さりとて出居見居る多者忠告して何も
ほろけとて浦田徳利に入繩を釣取ると神酒上りをも松天物
からとる者もしし酒を飲めとて強りた時飲て下すその村を伐居
にあつた年過る風俗も死せりといふ火のふも多事ハ知れとて及
明和四年九月に中野新治郎の裏家より火のけりて西の村枯安永
四年の以五村も焼くといふ人悲てふ家倒火怒火事の時明和五年
には多村も火を焼官改元年たるの裏家より火のけりて西の村切
せりといふ

△芳は、多平といふ一傳通院領の地とて小石川と地名に四ッ家河と
いふ海浜に連ねたといふ事一ヶ所小石川四ッ家河と書上りて多平とい

丹羽の森の時鳥の名

△大層と船塚中をえい丹羽 極と今一石を 極と今五石を
じし以跡居野といふ事これ目白の地をけりて信じて名へり御庭の西
の方下平地の大杉の奥に御方の並杉といふ今に有る又月見の御庭家の向
はうに御家のまはる松はの森宗鑑の墓ありて五石の石塔とて
小徳正の墓といふ事ありて御書の方松はの森といふ事といふ事
のまはる彼中をえい丹羽といふ此の方か何れと云

け山宗鑑といふ一は名を連歌の宗匠より山宗宗師とい呼居(大いそ
尺の山宗宗師といふ事宗鑑の孫に大層といふ事ありて人といふ事
文字に書る候事宗鑑といふ事御書の方松はの森といふ事といふ事
しる事候ことありて宗師といふ事と云い候事と云い候事

寺河邊に安し借りて之と云は朝邊の寺に匹し申元初年しと
 古く清光君を九月年有り宗繼の存の子に一字も書る事なれば
 かく時たてありし書きしやうて廿餘月と云は彼の時後了末て
 久しき自由を何せり人今今一す我は東北の山はく住ふ
 天初よりその礼と一主書と記す人として宗繼の事なり
 今一す如年しは元水河に取井戸と向ふ中是とを記し
 一敷へ石張の六角の積上井戸かじりて今に仰り西人多く人前
 小の年中より泥を吹上げて言得る多し取れり多しちも泥を吹
 流して水は砂子の色も又一透清水也是成今小泥吹の
 井として宗繼の事一さのく井とく申傳へり親言を記す
 下は宗繼の由は有
 此の内の極山梅林の森きしは宗繼の事なり氷をくくくくくくくくくく

○成就山本住寺

富士山本門寺末
二音庵ト云能述

小石川四家新小有善神堂ありしは焼失後本寺

有懸衣姫の祠

三途川

つゝの婆々の石像志古一子彼の百日咲花鳴を仰り

法願と加ふありしと七月施餞鬼星祭も仰りけり西殿に宗瑞始て

引越後任の西乞勺 四ツの処にありし

○溝に勝就振中しき明磨万治の時その本住方の如と隔て皆土井

能やと種正下初敷を申しけは包を新出り所ありと右直地に移され

後安正傳されしと溝を我がのふし石川住居原の古性七軒半耕化して

住居は溝の氏流拜殿地と成時百性源流山を根底輪廊の下に

住居の比と終ふ田畑あり敷今も持と成山の内と云

△本住方の住を能請と好二音庵と云宗用より小庵号改差下移して

尻河到毎年夏より二代白兔園宗瑞に水戸象の官中を飛騨権

由越下付てけ吉の西隣に仮宅を造らざれば向國とい池の端をたて
当別のうに飛思北東下付て別宅と云孫せし折なりと也

○昔能登と称する所 由拜領地といふ所系を並木檜桐

根を断り小あり 安慶と古坊と成て居るものと定りしゆり湯森中又之垣
沿を更と有は師匠家塚下た更と古川大坂を古馬の裏に付て又池
の所通りなり 不中半乾北よりして後吉也しりさりの名所なりしり
宝勝のあり病死にす流此家中あり今も存せり

○稻垣橋は昔は橋をたてた所の南側也

○水戸橋は下流に宝勝二年中飛流を極少般なり無樂山と云り古家市博
そは湯方よりせし取玉家長も各と測量りし人々と居せり軍文学文章

は廣長氏以上より 諸礼学校連継柔道の名家をたて是城を以て
鼻人多田満中を宗家大士の系圖とせり也 徳興の細川家後
續て花と活と樂とせり廣長が大夫白兔園宗陽と云人の子なり
子隱と云法れ今井上氏孫仙傳松井右次郎三代宗瑞と云花と
耕白亭の志勢小蝶と珠と送り文学の門人今古川流が家内小多
海母本宮小古多取新多末松下氏の子なり有る 佐々市上人
小傳鎗法長谷川氏又細門人教百友儀宗家今村氏鼻筆画化の
名人奉て教筆は是より後或村菊のは好有るは花屋の内五十十の花
壇と云ふれり此りと云し 寺丈八尺の菊と名も花屋と四方花や
取羅ひ傘蓋をさるるとくあり 城人とも見せられ宗介に空虛
のとりけは花の内古本往還の相違の候今に跡あり

○古南越系は下を女表は門前より樹にむあり 有信院殿あり
其相と云ふ乃の上は廣く松茂るるに寛政九年の春大雪降りて
西の方の松倒れり松の根を折りて松を拾自平茶より蛇信て木の
空穴をめて往來の松の上より痛むいむきの多かりし 或時女男縄の
とくまりて之を昔有るの倒てははるの御法なり

○新出馬町は古南越系前の但倉おと云ふ力衆同心方寛文の以前但し
同時は引移り 与力衆引馬田代と市ナレ一りりとの名はそ
向所裏より瑞とかま 門牙子取多介に盛なりし又南堤を至
とて文書の増し同居有りとも

○高田四の家は所と云ふ寛政 年有十九は南側平家地はゆん許ら
其以前は子稻田の孫をた支死に性高をたひりしけ地と入寂り云

きむじりけ地へ孫勝の傍まで云け地へ入定せんを成代堀と化り
て其内へ入結加跡坐し 一は居家皆人信仰して月々祭りの男女
夥しかりは七五半として彼牧院と云集え夜の内は遊遊たりと云
△其後の坊を孫孫承と云人住家直生還ぬるありはけ及小酒取り
てる集を徒集て云々もいふやとて大小富とてぬ家田道頭と目も及
かり丹波かとも有るあり物

△小側堀を数寸取りの名はけりけ地を女表を吉野赤月へ通ぬるは地
扱多坊なり

○神田の森古村の割ありし 去子細り神明也是より水産居あり
服屋下の田の端は農家のたをけり陰地也

関口より西の別荘を求めりて又二階の別荘とす

任法自秘宿願のほしきをたすとの所一は志をひかす也
けい時鳥の名所とて云々一と云物との橋山の山宮の名所とて五月雨
堀り馬の舟なり

△浄家中の内庭想をたす一関口岩の三舟ありしを余りりて万巻
の園を抄書て世よりしるふ又思後の武術長倉氏の文学世よりしるふ也
因家中の内庭四方に道と云人天交を小通一并任法相と云りりし
乃云けい小人生候受日月星の西より東に旋をまき暑暖冷の日道
長短風雨雲雷を抄書ののりしと云此の事候知らしめて死んを
誨小人倫小生乃の申受るるなりと歎きまひて宣りし

○正徳七年の寛政九年の秋山中園より前水の井城地せり一関口より

より行り貝取野を出入り凡三人余貝取の知有しと云れしは切望の
古木海を七百年以前より千年も前には埋まりて石と成りん大塚安成橋地
を我より遠来舟城地大舟の楫と云ふ地也一有り

在所の地を抄書て水を扱と云ふ関口と云

○関口の巻所是田沼松橋地を我より古木街の内の三軒と云ふ
鎮三軒と云ふ一其由來地を我より関口の西段の橋山下の井人少を
有けるを向山の方へ入るは地を我より関口の西段の橋山下の井人少を
本所なる道と云ふは出に地を我より関口と云ふ

○幸神宮往古にあり下小通用のたけりしは関口と云ふ乃を橋山下の
地也その前よりたの方へ関口と云ふは地也其のまは申候なりしと云
文母の地也
の兄吉月九年目よりて大工の音書として竹田流の地物と云ふなり親神職を

叶形ノ小文字を何と御書と云ふは作して住居の家内分復そ見へる
今ハ枯木を御書後掘平塚の内とて飛鳥山の下ニ神祇を爰あり
伊勢宮に似小住居を度今の神主より一伊勢宮に神及家内時識と云ふ
神代卷ニ下畧五名是猿田彦大神時天鈿復問曰汝將先我行乎抑我先汝行乎
對云吾先啓行下畧猿田彦神鼻七咫背長七尺餘也此神ハ七數を用事神秘云々
昔に云ふ聞ふ云の猿田彦神大寶元年四月庚申日掘出四天王寺
出現の幸神日下國の在地と云ふ猿七色の神秘もて其門ハ今も傳へ
庚申待月待日待ハ格別小寺あり

○泉光山蓮華寺 富士山本門寺能頭は朱下二十石 日向春岡に居所と云南側
泉光院殿の清息女 將軍家綱御方母君廣松院殿の市原山住正
少輔の園基まで深心より法如色利家小塚より蓮華院殿に世の法菩提

万治元年建立之故小山寺号と云西隣幸神の地より下小通及馬田西橋
此下を其の東を園基の上と云ある刻塚の向ふ今小古方阿り川小橋を依
して大門を付人ともやち昔の依り後其方西面と云も俗説の
化り方異なりを斯と云

△泉光山天孫越後言曰朝幸ふ安曇の古像の御達大士佐波の跡余其
年の沖也許何りて今所迎ふ其の小時老人迎ふ來て宗祖の聖院を存して
安曇内其言の一書と云布一む之の老翁入へるを尋求小社檀の多門
天鼓院を肩御を泥付て立ふ小宗祖法味と持寺まも平陽と慰れ
宗化の由越後言曰の日朝ち是之御高家將軍の由代と云ふ田振入
存ふ其後彼言像言田感再と云助法何りその因縁の言氣を爰不安
是有也院殿尼所の神鬼の感應今に於りて其時の由もやと云

△書神の社相殿小箱乃明神勅法以 養信養塔 宝物多しといふ
△雪塚 いさらの雪見小こ流し正まて ちせ成 雪方和為建
白眼臺雪才和尙の隣居の竹庵有り多則りその後之爰小白兔園の記
と書有るは此の所は後住居せられし白眼臺と号せられし地雪才
子小坂と云ふなり

白眼臺之記

上破道にてお知所多しなり記ス
け屋の眺望南を外山正三流りと尾上の極もそよみ幽きや夜合の
上流ハ流とゆえに流傍の鮎も爰も登る人ハ根の雪色瞬み冷小
方田の嫩草幸に暖く小窓に窓も多竹林又雪成雪の鳥とをふはは
何れ東又一窓の若菜若何り経多梵音耳に法之西ハ商家子孫よく
市井賑りく或果園も或園喧し驛馬の跡も曉の友と破り志ハ

くれふ室妙く名名の表と俣し くるきに旅心とわされど希く
面ふれと草廬と白眼臺と名をくも彼月の説教の更之院藉ス
世塵と白眼の白眼もくも和訓眼白眼と流れ世に未知已
城之西田友もくも知馬のらんり城おちのふ穴の玉楼金殿
の陰巷小北腰如流の涼意のうそなき唐アそわくしりたれ

○月白十景ハ東豊山新長谷寺小祖兼南郭先生等の詩歌の額有と云ふ見（信）

- 戸山村霞 早稲田雁 赤城花雲 濟松夕螢 白馬臺鐘 おえととて
南浦とて
- 竜興晚照 椿小郭公 關口吐月 駒突坂雨 駒留橋雪 十五景と
されし

○若狭を極は隈居新ハ月白不動の西隣に石錢伊勢を極ハ代州河原又
中越更政八年也其の地ハ仰住居と云はる十景も富士山ありと云へ
三三双の佳境と云へ

○大寺院極下を為すに將軍家走給御控遊を為ししと云今も知と云

○日向不知言 去言 東豊山新長谷寺 園の円通寺竹生池坊有宿院と

砂子云云を言其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

荒河の納一艇に地を安置に中興基長谷の妙音院池房秀并信白元和年

再興に為幸由來野長足利何のたつたける像何の善怒よりてやり本

信玉と少付如長妙を言其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

領之流郡石見も言其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

の流郡石見も言其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

欽命下りしと云住古白る多し其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

△長河衣子復何 時の鐘 境内住家の地を言其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

大寺院極下を為すに

け本なる中観樓と額有りし其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

組來南郭先生詩文章を其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

有り江戸十六番め

○八幡宮黄檗宗 洞云禪寺別當の上の八幡と云其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

神靈の井有り隣の養國をけ地より言其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

弦を言

○園の約井下言多し其後不知明王に法を師湯殿山に於てく眼刺二龍の内言

八幡の井有り

○言田岩川雜司春の三つより東の方へ入と清土と云雜司春所の小名より
鬼子母神出現の日生れたの道ちれおくまを道來け先此組に我御家人
其由本坂不知清道と書より家といえり清も良し 糸取 茄子を産出村也
坂位一処入り口廿四宮め以不恒

△やうん坂茶漕とも書野辭も射干とも書通俗旅とやう人と見え
清土の前本位此坂の坂に推長塚と云やう此坂もれいなり故人是と
やうん坂とて草漕と云化物とらげやうと今に坂をぬ紐やうき各坊の
いなり入り口やう坂坂やう人坂と云傳り

○鉄液稻荷大明神^{カキウ}此地結と上又金山よりと云 石堂^{カキウ}稲荷
石堂稲荷^{カキウ} と言稲荷の住居にても度神も各所也今に鉄を此利益
長多一例年正月初午小祭若い廿二祭籠なり

△尚社西嶺山の峪ガケとて或年山崩れを大なる穴有り其穴より下流有り上流あり
一人此より形を骸骨有り下流ハ二人をかり居たり形を骸骨されを傳へ
ありし時上流の骸骨長サの身軀は結果三人の衣類はとられて形
のちもその服の身より若くは平流魚と有り平流魚ハ流りてさし
今年半前より好東より有りて又一種穴有り是より死骸有り一河
ありしものより也や何の時何者ありや不知

△尚社の下用水の井と堀一有り若くは堀と堀抜き下より何れも金
き着と水中より仰ぐれは蛇の背ハ堀中を恐きて井戸堀を命の者も
左り来り由臥あや大芥と引掘り平流と云者井戸掘りて伐取し大木の
高甲をさし黒く何れ本とも知る一車る家殆ど今有とけり
川傍を川之言来大川埋て居と故一は本何の時倒埋り之神代

此のよき也

○信尾川多流あり是おほく河又おほく滝と云一は出流ハ川あり
有りし水流一の所ありし年とありし流ハ川と三三万斗の有りて
其の流る所は有りそむえふ知

○神田久保の金山給あり東流来の月低き地成云者けは里傳部の主
其有り史記花と谷と云又柳下氏の先祖を教ふ有りし時柳曹司の役
ありし取曹司と谷と云と云ふ地名又法明寺地名に帳あり傳司と谷と云
えより花と云ふあり致も天正に地名之想今の雜司と谷に其後云遺
多有り有徳院殿前山御の花飲命より有り雜の字と用と里語
○里生跡の清水ハ多有り指丸殿のうらに有り指丸生殿あり所也むりし
山に在るなり田口新たつありと折丸ありし夜ありし事あり故ふ或夜二人を

又定以系池水小星北よりて心なり景也一とて其地の辺に地はれぬ
仏像も似きふもの成ゆゆ一且と東陽坊の大行院にありて見せり
鬼子母なる夫なりとて本寺の娘に納むる妻にや一と縁記も此
此の面影にやう家の鬼子母神に又是れ似たり秘仏のさ像と云はけ惣
此少一も不遠具像なりと大行院日慈師に信下あり一

○腰懸稲荷の宮別由田金兼院 去言此地の南側は皆由石川
地也石川傍通院鎮の跡寺と云む

大猷院殿孫御願の寺
は腰懸をられ家より石川に氏子の子に持たせ道と云ふ御願の寺
也

○紀の玉之浦高野の南より紀伊の東に有る云又青山古殿の古跡也
紀伊の古相領地也一由よよ計地の年貢青山百人町一今も納と云

○三所目五郎道徳前と進言二年小石谷志徳より引移と云瀬川の中
よりいよの前なること坂下の石川園に土名場と云処あり大荒井園始て善法
の跡と云りし也

○清土石橋と松尾橋と云護玉ちこりて善法は法是川の左ふかりあり
橋あり

○星谷橋也清土上りの石橋也善法は法是川と南所單なる小石谷村に在り
○小笹坂本津寺の前縁のたを御願やち東を谷のたを愛し新法院と
云今も畑も切ふりたりと云一と多し本津寺の東通のたの事也

○田生谷（ひやま）継古名を月知後には道小車一と星祭り坂候たを星祭り也
本津寺の東所場の如く申すなりと云谷の古来より井あり早魁（はやか）のたふも
絶に今も流るる源護玉は東門の南谷より流りて難司谷の一田端の石水

絶に今も流るる源護玉は東門の南谷より流りて難司谷の一田端の石水

星谷の井足之村家傳と云者の言愛不病工後死故ふ井足埋りし位ふ
捨玉娘と傳むへーハ此田村同志の友傳るをこれと聞ん今今食ふるふ
汲井ハ白生の井古くは深かり今不為す未て汲井水茶水不承る人多り
流の少傳のハ白生の井ハ古く改也

○大野山本淨寺 身延山末法華宗本寺の開基真珠院日要大徳と云キ十九
とし没し千明曆三丙申九月と云キ後文明院殿の近代根津甚平抄現と記法
阿とて波地不有一本淨寺故室永三年九月雜司谷不毎坂の移しは禮もや
亦不傳るハ主命近未幸ありし成けきさこの事有と離未由及も遷
移の時因知院日生と云中興を正行院日保と云元禄十一年不死代
松和谷代と云里人地同坂の住職也

△七面大明神 身延雛形の尊像と云元禄本入神祇もれとも中山悲院也

形之竹と古く位今の位有り日在國ハ身延と高寺の七面云ハ左國神名

帳記云

縁記の畧ハ云由社七面宮ハ昔本山寶頂日脱聖人紫衣勅許の
初當寺且那大野氏藤江河某熱功少ハ此是と謝せ人為尊像と
換りとも其の靈像ハ身延七面の雛形ハ宝蓋ハ傳る年也
付紫衣實收執の悦とハ滿山評評の上位作ハハ大野氏ハ換り
と別神道長上三位高兼連自筆願并幣位連高社ハ在例
今に坊ハ感應靈驗日に登り委くハ縁記有ハ是日客ハ五九
月十卷陀羅尼日に奉經阿の祭禮九月十八日の夜奉詣多例也
江戸遊生ニ傳り云ハ夜中説法明立十九日陀羅尼修行兒供養志飯
未出ハ志願ハハ此ハ事ハ傳れ有ハ此也

△運命守護大黒天神安正の事由宗祖大士清澄不在せし以是生と名ふ
小黒安正の事由知恵成神と清通の経典教習及青梁香城焚て事
と集め其の弘安三年其香を煙煉て大黒天神と名化し弘安三年と云日親
聖人感得何ぞ究報を流るれ無疑なる色と親師法華經今も何れ地
後宗祖形を有る文云 此徑尊日蓮日讀以青龍凍之 五百歳後流
布是生印文字リ不待事五分御別是主の事所有て也大黒天運命守
護と日記有る神を楯と袋と指右を関する新出ら所与力横井氏榮寺院請奉
納公年斗
△芭蕉翁月見塚の祖翁百回拉瓦七十回宗陽五十年曲と供養長長人
竹形の塚具以水陽洞水石明和を建脊山見塚と名ふ也二代後公免國宗陽
建之

表面中 名月本堂の石務や田のくもり
右 名月や愛いあまりのおとろけ
左 名月やろりおとろけ
け用方小三代宗陽の墓所の坂上菅宗陽之墓と有

△番神本堂 勸清の △真田福荷社伊豆守殿祈禱平愈の事建大隆院代
△當寺の祖師感徳寺と名ふ而も前代も金子氏承代の奇進之宝塔も同
○此大の石は浄土西の畑の上を石余南の地へ今畑を以て成地亮朝院後有
○三ヶ所の塚大横の下小例を小くも領也車巻平院の生國中仙乃二殿宿
本村の関基の事と保元平治の乱も地限河の親王古記の事

家も蔵の古所泊とて今に有り金子一統の墓所は華田下と云ひ有り
の研習の時、既、漢代八幡と初清一南村清と云ふ春秋多々の祭祀
上備に分ち有り、取集今も送り廻持、白烟八幡、法供、面よりとも、
として今も金子右馬頭、代の孫、平次、の孫、不、
竹、美、法、好、裸、王、を、年、中、に、居、し、車、持、也、と、け、地、の、業、と、
向、子、と、田、四、つ、家、上、下、寸、の、居、上、信、と、の、不、能、守、せ、
不、能、守、不、報、き、り、不、我、也、一、今、も、ま、た、と、信、之、
為、尔、と、車、也、と、取、集、と、志、と、せ、す、一、
之、業、と、れ、と、天、地、の、妙、冥、の、理、と、信、と、一、世、法、の、
由、人、と、神、仏、と、佛、宣、法、と、信、と、一、
又、
又、

又、信、が、信、と、教、り、と、の、信、り、の、教、也、
神、仏、の、神、代、から、生、て、居、る、内、魂、と、
に、え、す、と、も、也、く、と、一、
首、次、動、員、の、合、兵、と、云、る、之、
い、や、と、と、不、妙、と、云、ふ、
限、て、さ、す、神、く、頭、の、上、
る、由、り、身、り、精、志、と、云、ふ、
の、危、と、法、務、と、い、て、
を、法、務、法、の、多、く、
と、外、と、云、ふ、出、さ、り、
也、多、く、法、務、と、云、ふ、
と、外、と、云、ふ、出、さ、り、
也、多、く、法、務、と、云、ふ、

破四ハナリ—その教訓も紙小あつこ—心易くそ語小深味有りとも
され—身こ多かり家

○忠八翁が社殿及の東小入たふ有りけり翁云—律我身命の人々
の福の人ま可導我理道孔有る人るれ翁常に博奕の端を—く
右に京阿まう小肩多る翁云—又博を遊ても其人の才の立ふ
にさしけはうりさけ親の勸法も—社とりや ちちの氏祖也

○南中乃と字あふけ西と入といえり元張氏の先祖小は右馬と云永字の
爰に佐々木りこそ赤い知人か—とや—田口氏有りしけ地の池
頭佐佐木何果と云人の苗字取世改りさよと

○柳下若校の別家利右馬と云字入と云—りを右と云て日記多く先祖
傳東の武具方戸張の先祖河原乃西隣入り利右馬といふけを死す也

乃古来乃乃北と云

○小北名と柳中助有る柳下若校の本家と云横所小柳下士右馬門地を成
元祖之鬼子女神出現の夜といふ家持具り新湯を禁限と法免はる
至今に家持と云れと若湯の釜と後人の分付と云る人をも日記有
り青葉化らるると云有り

△おお小若名物と云く—と味強ふる味ありち根根羅蘭も味外に異なり

○柳下安彦と云者有り田家そ入の田舎と云旗野での画舟の布衣なり
或人肩と身多り物持長れを畠惣今の亭主と曰五才小村役と勤
前安彦の自持有人と云人の持—と云此家高人と席風におもはれ
まをと云ふ人有り或夜扇風の持てても人ふるる—りらと云年所

秋も曲^{ちが}りものと云ふは、傍に居るを見て、三々張心や、何ぞ延びて、
我はこれ老あしく、聞て、三々三々の、おとあ、もの中、分岐して、年、た、
ま、奴、お、ま、え、久、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
聞、は、大、く、ち、ち、の、り、を、能、得、お、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、れ、と、我、お、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

○市道、お、お、の、通、け、安、ま、馬、の、後、お、お、お、お、お、お、お、お、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

○向山、赤井、を、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
今、細、と、お、

○四ッ家、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
今、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

今、爰、に、つ、を、留、り、ぬ、古、外、割、れ、何、し、ぬ、れ、の、け、ま、ま、ま、ま、
云、而、練、る、毎、四、の、家、上、所、と、云、

△廣岡、先生、の、神、廬、は、古、伏、傳、の、位、正、と、申、門、小、松、と、拙、書、に、述、
き、本、と、云、集、何、り、又、助、込、分、移、り、れ、時、々、花、梅、車、に、附、て、別、う、郡、と、思、
う、是、は、富、別、と、稱、在、但、半、の、西、隣、の、地、お、仮、住、の、一、と、云、四、六、年、の、後、
爰、よ、移、り、の、ひ、ま、三、条、お、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
都、北、天、文、家、の、印、文、也、武、藏、守、野、物、持、も、け、け、の、選、集、も、し、餘、り、
△緑、梅、屋、積、所、在、側、拙、本、危、か、ら、い、危、し、取、り、万、里、の、離、遠、爰、よ、と、
幸、傳、り、

△淋、石、寺、領、の、松、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
代、地、お、流、る、松、の、奴、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

市原代の住居

○高田の家所を田のうづらの地の住居万姓十三軒は地へ移延享二
五年此地を移下所と一田家地所を辨しあり所方をうづらの所の所並
と改多ふと云ふ事多し

△鴉山は地所上の事と云ふ一 徳代根沖出ぬ一と鴉と多
云せらして御鷹^張鳥とてあふと云ふ山とせよと云ふ事有りし
及三石と伝祖来と云ふ詩有之今いふ見はあらと云ふ住居なり

或人云 大猷院殿御成のセウと云ふ名あり一
△妙見と云餅屋有り一 信仰ありて名と改まればけうらふ
才多居と云の家ありし

○早稲田神所掃所にて 根宮村の神宮の早稲田の神有り云出す

公計度銅の持物も形いれしと

幅寸七八分と云武勝蛇と津舟



腰不言く帝そ衆善奉行諸思莫作
と云ふ教書あり前七十三道の具存裏
名有是也中分あり

○安房村下を根下所云之代將軍家の御時此地と云ふと有り時を
云思一と強りしと云ふ事有り御更御持の事と云ふ事有り酒井
本代しき下所の住居改所出上現有りて名と入せのひとと鼻白と
三精二方の本根下所せし

△同本所後申程を氣取又いり塚と狐塚とも云雜司谷と池袋長遠
の塚と云奥品征伐の時市凱陣有り一 夜討の地有りてと云ふ事有り
ゆいり下所より云ふ所見塚と云ふ一 藤山と云ふ所軍兵ありて所
一 故と云ふ事限と云ふ

3072

99751

